

都城市文化財調査報告書第27集

UE NO SONO

上ノ園第2遺跡

都城市早鈴東部土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

1 9 9 4 . 3

宮崎県都城市教育委員会



上ノ園第2遺跡遠景



上ノ園第2遺跡全景

序

この報告書は、平成5年度、都城市早鈴東部土地区画整理組合の委託を受けて都城市教育委員会が実施した、上ノ園第2遺跡発掘調査の概要報告書であります。

近年、当市においても、市街地の拡大や大規模商業施設の建設など、公共・民間双方の事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査が急増しており、今後は関係機関等のもとより、開発事業者や地域住民の方々に対しても、より一層のご理解ご協力をお願い申し上げたいと存じます。

今回の上ノ園第2遺跡の調査では、古代の建物群とともに氏姓と思われる墨書の入った須恵器・土師器が出土したほか、中・近世の居館址とみられる大規模な堀に囲まれた建物群などが大量の遺物とともに発見されております。

こうした発掘調査の成果が、これまで空白だった当地域の歴史の一部分を埋める資料として、また、学術的研究資料の一つとして広く活用していただければ幸いです。

最後に、発掘調査に際してご協力をいただいた都城市早鈴東部土地区画整理組合、都城市都市開発課、都城市土地開発公社、ならびに発掘作業に参加して下さった地元関係者の方々に対して、心より感謝申し上げます。

平成6年3月

都城市教育長

教育長 隈元幸美

例 言

1. 本書は、組合施工による都城市早鈴東部土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書である。
2. 「上ノ園第2遺跡」の所在地は、宮崎県都城市早鈴町1841番1他である。
3. 発掘調査は都城市教育委員会が主体となり、同市文化課主事横山哲英が担当した。
4. 調査は平成5年7月1日から平成5年12月9日にかけて実施した。
5. 調査の組織は次の通りである。

調査委託	都城市早鈴東部土地区画整理組合		
調査主体	都城市教育委員会		
	隈元幸美	教育長	
	松山充	文化課長	
	遠矢昭夫	文化課長補佐	
	海田茂	文化課文化財係長	
庶務担当	田部井寿代	文化課主事補	
調査員	横山哲英	文化課主事	
調査指導	藤丸詔八郎	北九州市立考古博物館館長	
	甲元眞之	熊本大学文学部助教授	
	永山修一	ラ・サール高校教諭	
	千田嘉博	国立歴史民俗博物館助手	

6. 掲載した遺構実測図の作成は、横山、下田代清海、吉村則子、大盛祐子、野口虎男、浜田寛が行った。
7. 遺物の実測・製図は、横山、猪股幸千代、池谷香代子、雁野あつ子、水上和子が行った。
8. 遺構・遺物の写真撮影は主に横山が行い、遺構の空撮については㈱スカイサーベイに委託した。
9. 木製品の樹種鑑定は、㈱古環境研究所に委託した。
10. 使用した基準方位は真北で、レベルは海拔絶対高である。
11. 本書の執筆と編集は横山があたった。
12. 本書に関する遺物・記録類（写真・図面等）は、都城市立図書館内埋蔵文化財整理収蔵室で収蔵・管理している。
13. 本書では、次の通りの略記号を用いている。

SA - 竪穴住居跡	SB - 掘立柱建物跡	SC - 土坑	SD - 溝状遺構
SE - 井戸	SF - 道路跡	SK - 土壌墓	SX - 特殊土坑

目 次

第I章	調査に至る経緯	1
第II章	遺跡の位置と環境	2
第III章	調査の概要	2
1.	調査の内容	2
2.	遺跡の基本層序	2
3.	遺構・遺物	3
(1)	遺 構	3
(2)	遺 物	12
第IV章	小 結	20

表 目 次

第1表	上ノ園第2遺跡出土遺物観察表①	13
第2表	上ノ園第2遺跡出土遺物観察表②	17
第3表	上ノ園第2遺跡出土遺物観察表③	18
第4表	上ノ園第2遺跡出土遺物観察表④	19

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	1
第2図	上ノ園第2遺跡グリッド配置図	4・5
第3図	SA-2 実測図	6
第4図	SB-51 実測図	7
第5図	上ノ園第2遺跡遺構分布図	10・11
第6図	遺物実測図(弥生・古墳時代)	14
第7図	遺物実測図(古代①)	15
第8図	遺物実測図(古代②)	16
第9図	遺物実測図(中世①)	16
第10図	遺物実測図(中世②)	17

図 版 目 次

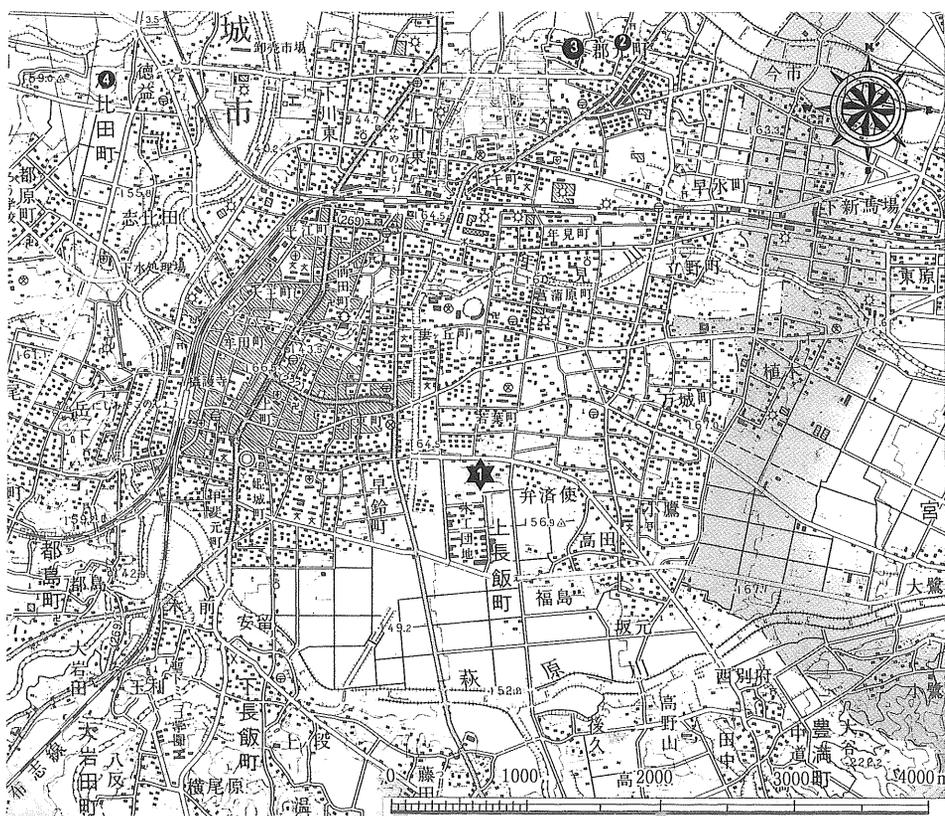
カラー口絵1	上ノ園第2遺跡遠景	
カラー口絵2	上ノ園第2遺跡全景	
図 版 1	上ノ園第2遺跡全景	22
図 版 2	SA-2完掘状況, SD-12・13掘下げ状況, SF-2~6完掘状況	23
図 版 3	中世の掘立柱建物群全景, 出土遺物(弥生・古墳時代, 古代)	24
図 版 4	出土遺物(古代)	25
図 版 5	出土遺物(中世)	26

第1章 調査に至る経緯

上ノ園第2遺跡（市内遺跡番号1002）は、昭和61年度に都城市教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査によって、古墳時代の遺物散布地として、その所在が確認されていた。

平成2年11月、当該地区において組合施工による土地区画整理事業の実施が計画されたため、平成3年12月、都城市教育委員会文化課が遺跡の範囲及び遺構の密度を確認するための試掘・確認調査を実施した。その結果、事業予定区域内のほぼ全面から、古墳時代から中世にかけての遺構・遺物が出土し、当該地区における遺跡の存在が判明した。そこで、同文化課では都城市早鈴東部土地区画整理組合との間で、埋蔵文化財の取扱いについての協議を行い、事業施工上保存の困難な部分について、事業実施前に記録保存の措置を取ることに決定した。

発掘調査は都城市教育委員会が主体となり、平成5年7月1日から同年10月31日までの予定で着手したが、例年のない悪天候と予想以上の遺構の広がりのため、同年12月9日まで延長された。なお、最終的な調査面積は約10,000㎡である。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

1. 上ノ園第2遺跡 2. 久玉遺跡 3. 松原地区遺跡 4. 正坂原遺跡

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

上ノ園第2遺跡は、都城市街地の南端を東から西へと流れる姫城川（大淀川の支流）の南岸沿いに延びる、緩傾斜の台地上に立地している。遺跡の標高は海拔149～151mで、今回の発掘調査は、その地形上で最も高い部分約10,000㎡を中心に実施した。

当遺跡の歴史的環境としては、遺跡の隣接地に残る「弁済使」*という字名や、それにまつわる永井一族の薬師堂や石塔群跡（伝承）などから、中世において当地がかなり地域の集約的な役割を果たしていたと想像されていたが、調査の結果、それを裏付けるかのように、周囲に堀を巡らした中世の屋敷跡と思われる建物群や、古代の建物群などが検出された。

* 荘衙機構の中の役職の一つ

第Ⅲ章 調査の概要

1. 調査の内容

調査は、調査地点の現況が水田であったため、対象区域全体の表土を重機で除去した後、N・S線に一致して遺跡の東南角を基準とする10×10mのグリッドを設定して行った。

なお、調査区は土層観察用畦で4分割し、便宜上北東部から順にA・B・C・D区とした。このうち、A区からは中世の屋敷跡とみられる建物群、B・D区からは古墳～古代の住居跡・建物群が検出された。遺物は、調査区全体にほぼ万遍なく散布した状態で出土しており、その総数は約8,000点である。その中でも、須恵器の出土量の多さは、特筆すべき点である。

2. 遺跡の基本層序

本遺跡の基本土層は6層に分層できる。しかし、土採り工事や耕作、中世の造成工事等の影響で不画一的な様相が強いため、最も標準的な部分について記した。

- 第Ⅰ層： 灰オリーブ色砂質シルト層（耕作土層）層厚 25cm。
- 第Ⅰ-b層： 第Ⅰ層がやや硬化及び赤化した層（水田の基盤層）層厚 8cm。
- 第Ⅱ層： 文明降下軽石層（ブロックで局部的にみられる）層厚 3cm。
- 第Ⅲ層： 御池降下軽石を疎らに含む黒色粘質シルト層（遺物包含層）層厚 20cm。
- 第Ⅲ-b層： 第Ⅳ層の漸移層 層厚 10cm。
- 第Ⅳ層： 御池降下軽石層（遺構検出面）層厚 30cm。

3. 遺構・遺物

(1) 遺 構

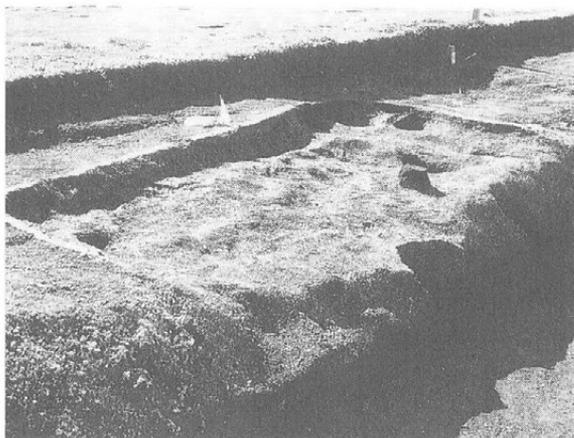
今回検出した遺構は、竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡51棟、溝状遺構36条、土坑28基、井戸1基、土壇墓3基、特殊土坑2基、道路状遺構9条である。

① 弥生・古墳時代

弥生・古墳時代のものと思われる遺構は、竪穴住居跡5軒のみである。当該期の掘立柱建物については、今回検出した約1,300個の柱穴の埋土からみて存在の可能性が高いが、確定しえていないので、詳報は本報告に譲ることにしたい。

SA-3は、弥生時代後期頃の竪穴住居跡である。土採り工事によって半分は遺失しているが、方形プランで、一辺約3m、中央部に支柱穴を4個もつ住居跡だと思われる。ほぼ床面直上から当該期の甕形土器の口縁部から胴部にかけての土器片が出土している。

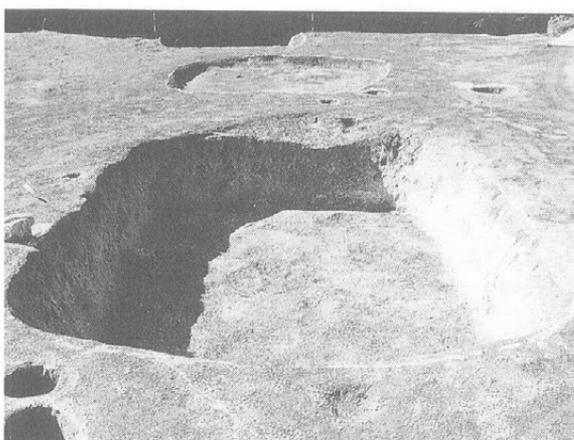
SA-1・2・4・5は、古墳時代の竪穴住居跡である。SA-1・2は、出土遺物から古墳時代前期頃のものと思われるが、SA-4・5は遺物が小片であるため、具体的な時期比定は困難であった。SA-1は、長軸4m、短軸3mの隅丸長方形プランで、埋土中から高坏、甕形土器などがセットで出土している。また、プランの北西隅に、赤化した粘土塊や灰などが集中していたので、かまど跡の可能性も想定して調査したが、構造的な把握はできなかった。SA-2は、一辺約7mの隅丸方形プランで、壁際を巡る側帯溝から4個配された支柱穴までの間はベッド状遺構のように平坦面が続き、中央部に向けて徐々に浅く窪んでいく。また、窪んだ部分のみが張り床状に表面が硬化している。SA-2内からは、大型の甕形土器の胴部、口縁部に櫛描波状文のみられる複合口



SA-3 (3号住居跡)

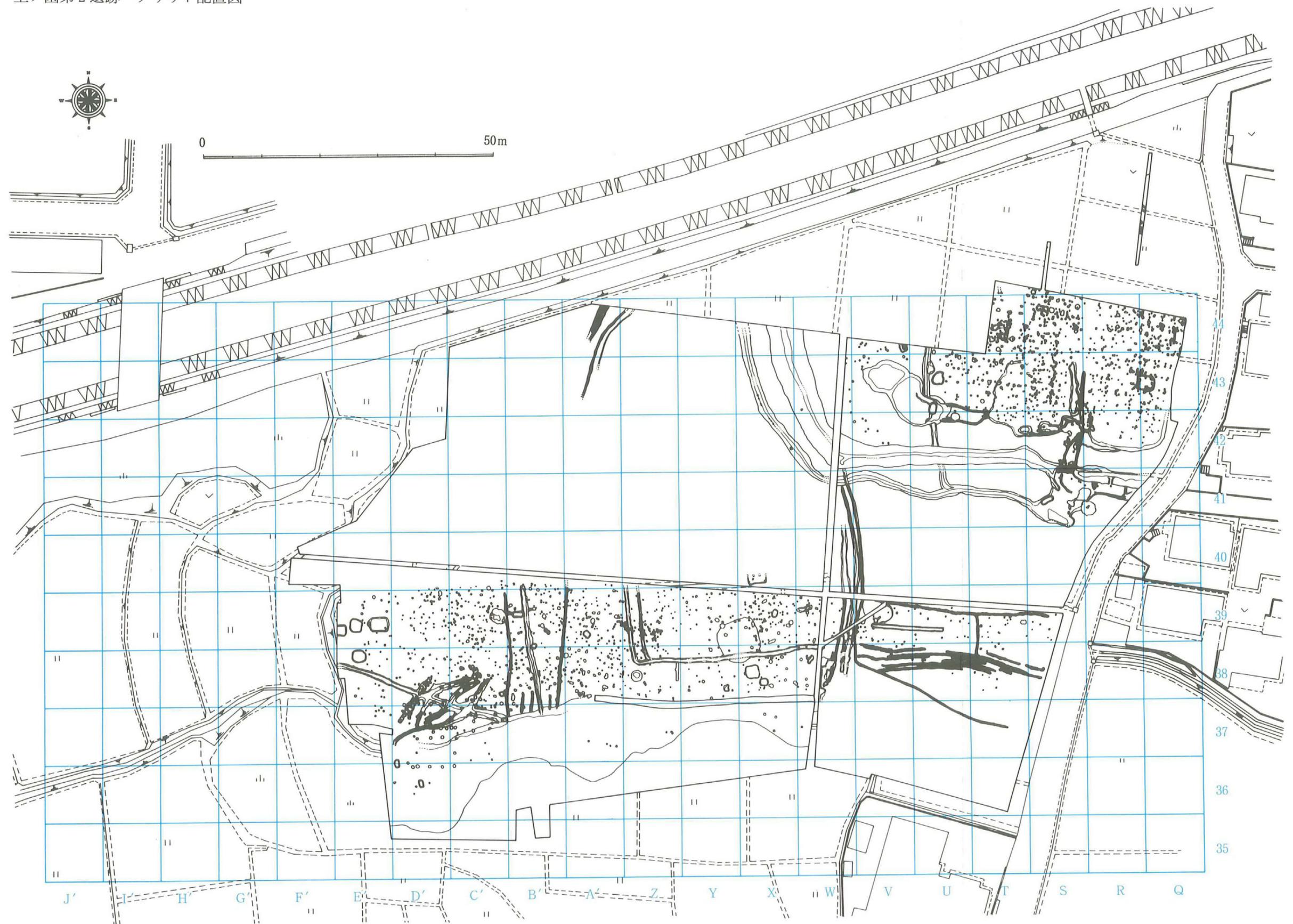


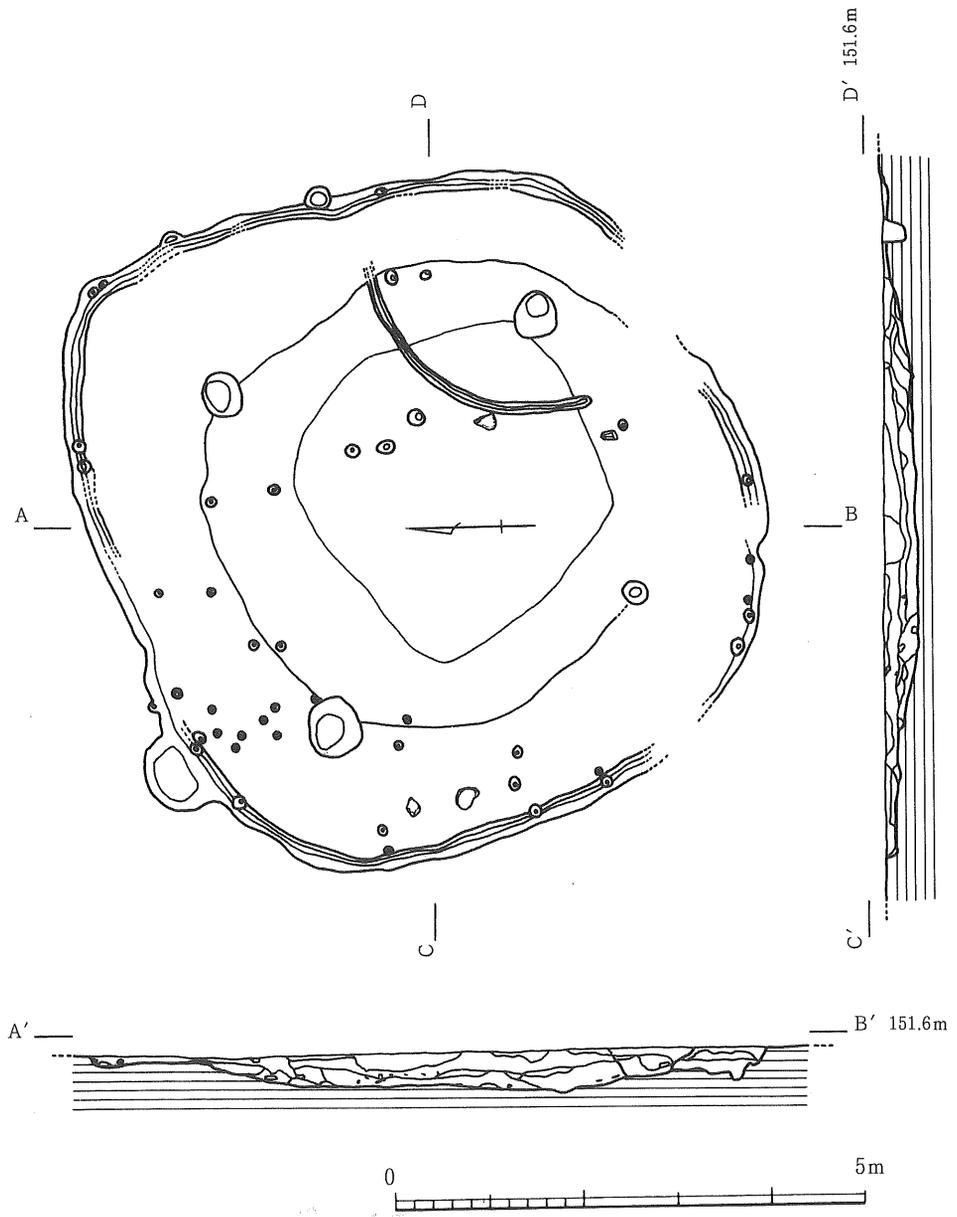
SA-1 (1号住居跡)



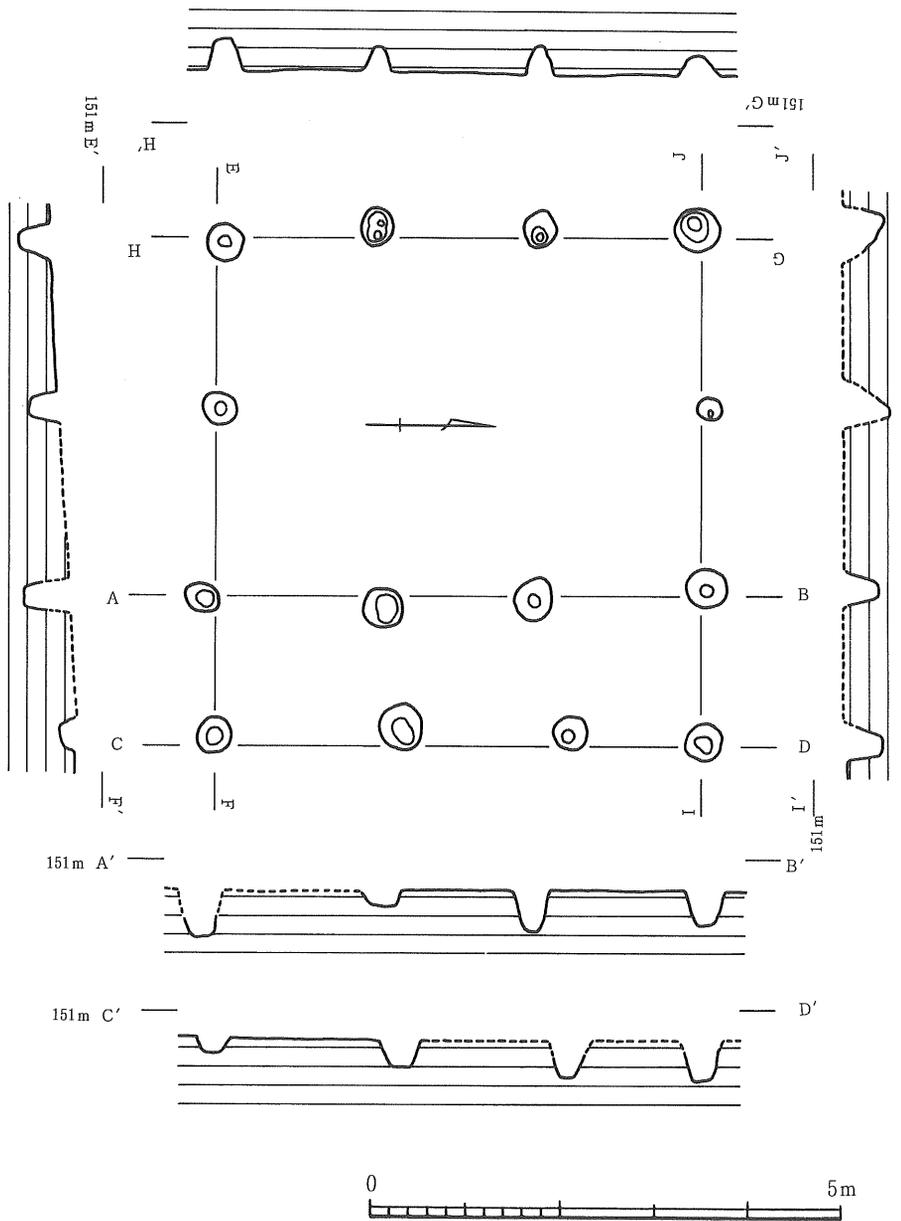
SA-4 (4号住居跡)

第2図 上ノ園第2遺跡 グリッド配置図





第3图 SA-2实测图



第4图 SB-51实测图

縁壺、高坏などの遺物が、かなり大量に出土している。SA-4は、西側部分にステップが張り出しており、検出面から床面までの深さが約0.8mを測ることから、住居内への昇降口かと思われる。SA-4・5いずれも、床面（御池降下軽石層内）直上の赤化がみとめられる。

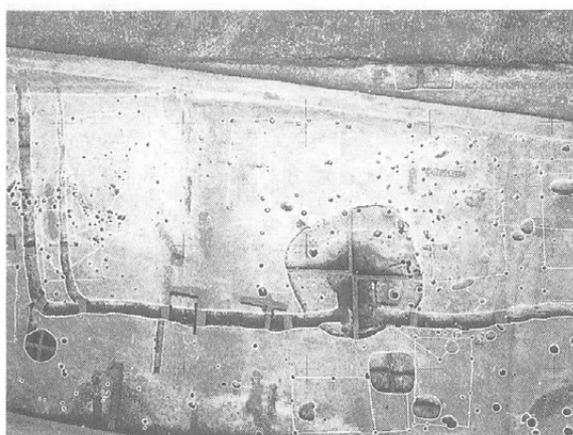
② 古 代

今回古代とした遺構は、共伴する須恵器の年代から、9世紀代を中心とし、上限は8世紀後半、下限は10世紀前半頃と想定した。主な遺構は、溝状遺構5条、掘立柱建物跡31棟、道路状遺構7条である。

SD-12・13は、L字形に走行する溝状遺構で、共伴ないし、SD-12がやや先行する形で機能していたようである。SD-12の北端は土採り工事によってすでに破壊されており、東端もSD-11の手前で途切れている。SB-22～32は、この溝に取り囲まれたスペースに建てられていたようであるが、その棟軸方向、配置、切り合いなどを勘察すると、方形に巡る溝で区画された、いわゆる官衙機構的な色彩の強い建物群として捉えられるかどうか、その性格付けについては問題点が多く、近年出土例の増加してきた郷クラスの政治的施設の可能性も含めて、今後再考していきたいと思う。

この建物群の分布している平坦面（D区）には、SD-12・13の外側にもかなりの数の建物が点在している。その埋土や棟軸方向から考えると、古代以降の建物が含まれている可能性は否めないのので、今後、遺物の整理と並行して細分していきたいと思う。なお、今回検出した建物の規模は、2間×3間のものが主流である。その中でも、SB-41・51のようなかなり大型の柱穴をもつものは少なく、また規格にも統一性を欠いているように思われる。

この建物群内の通路跡と考えられるのが、SF-



SD-12・13(12・13号溝)



SB-51 (51号掘立柱建物跡)



SF-2~6 (2~6号道路跡)

2～6である。SF-2は、SF-3～6を切る形で東西方向に走行する道路跡であるが、SF-3～6については、その形態及び分布状況から、どのような機能をもっていたものか想像することができない。これらはいずれも径40cm程の柱穴が連結したような形状で、柱穴状の落ち込み部分には須恵器や土師器片を多量に埋め込んでいる。硬化面は、柱穴内埋土の上面及び柱穴底面にみとめられる。一般の通路としてだけでなく、物品の運搬路などの可能性も考えていく必要があるだろう。

なお、当該期の遺構が分布する平坦面の南側には約1mほどの段差がついており、その下には旧低湿地帯と思われる地形の入り組みがみられる。その部分からは、北側の居住区域から意図的に廃棄（投棄）されたと思われる須恵器・土師器片が、大量にまとまって出土している。

③ 中 世

中世の遺構は、A・B区を中心に、溝状遺構26条、掘立柱建物跡20棟、土坑12基、特殊土坑2基、土壙墓3基、道路状遺構2条、井戸1基を確認している。その中でも、調査区北東隅で検出したSD-1によって区画された区域内からは、数多くの建物跡と共に園池（庭園遺構）の一部とみられる特殊土坑（池？）や、門跡と考えられる対になった柱穴群、暗渠状の側溝など、中世の屋敷地を復元するのに十分な資料が出土している。

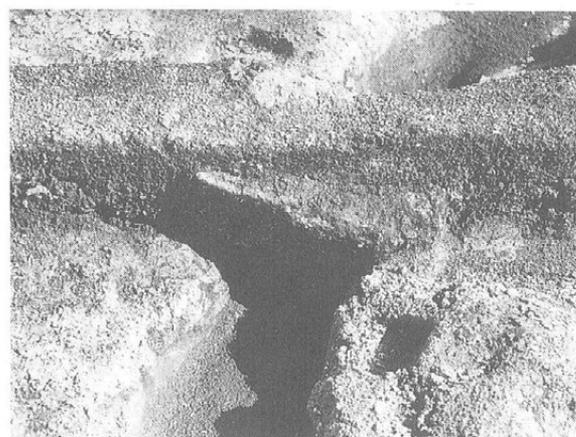
SD-1は、「L」字状に巡る大溝で、遺構の北側を西流する姫城川を利用して、方形に屋敷地を区画していたと思われる。未調査部分や姫城川の流路変更なども考慮しなければならないが、南北約60m、東西約90m、面積約5,400㎡ほどの屋敷地であったと推測される。

この屋敷跡に関連する遺構としては、まず屋敷への入り口である升形（虎口）状のSF-9があり、正面に門跡（柱間1.5m）と思われる柱穴が対になってみられる。門の左右、SD-1と建物群の間の無遺構地帯には、土塁が築かれていたと推測されるが、その痕跡はみとめられない。

次に、屋敷内の通路SF-1に沿って側溝SD-



SD-1（1号溝）周辺

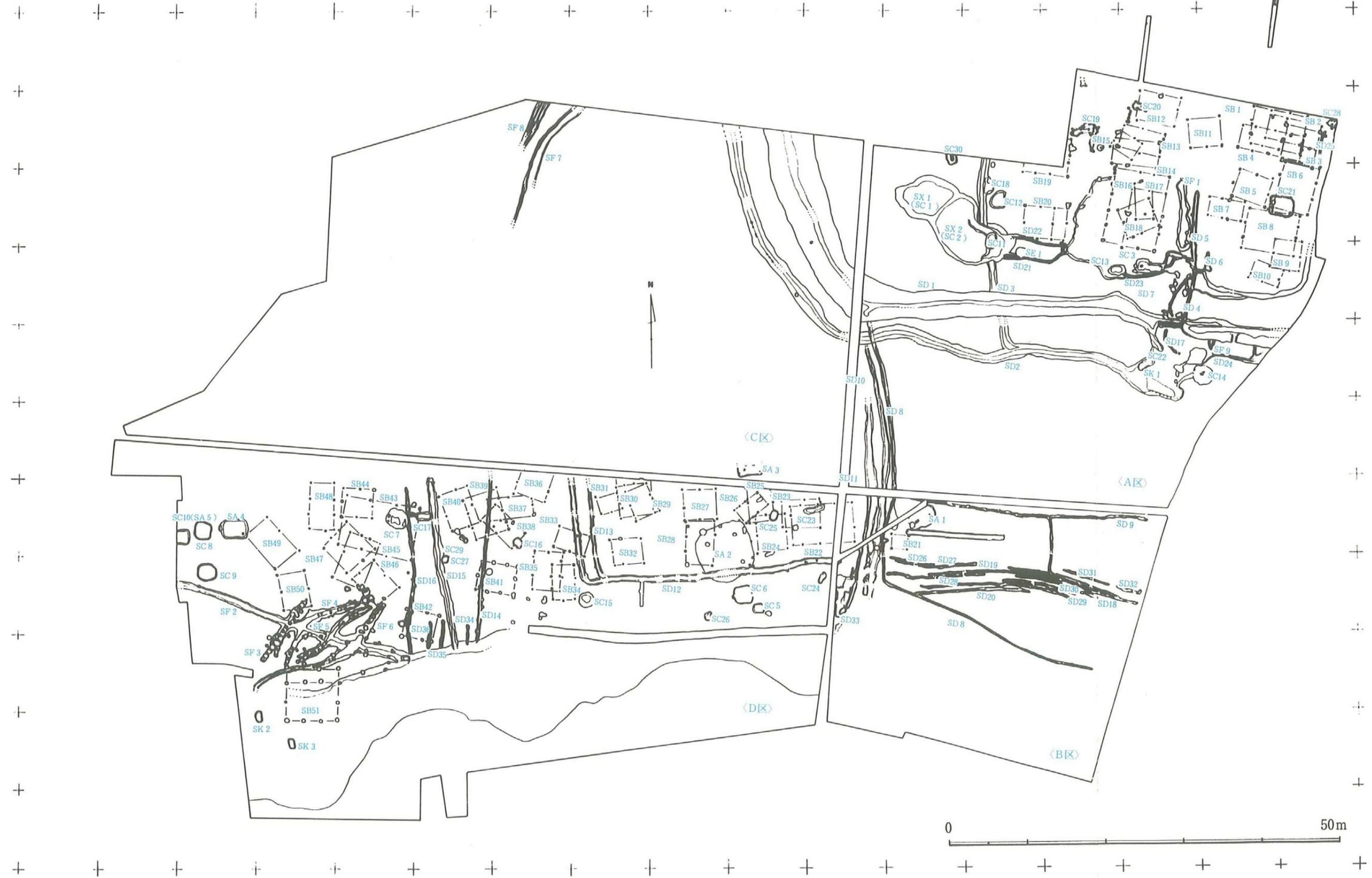


SD-4（4号溝）の軽石製蓋



SX-1・2（1・2号特殊土坑）

第5図 上ノ園第2遺跡 遺構分布図



4・5が走り、そのうちの一部は軽石の板石で蓋をした暗渠となってSF-1の下に潜っている。また、SF-1の左右に広がる建物群は、その建築範囲のみを一度アカホヤ面まで掘り下げた後に、土を版築状につき固めながら造成しており、SF-1より約30mほど上が生活面であったようである。なお、今回検出した建物群は、その規模や屋敷地内での位置関係から、付属施設（倉庫・厩等）が中心で、主殿（会所）部分は未調査区域内だと思われるが、調査区拡張に対する地権者の理解が得られず、現状保存ということで、今回は調査を行わなかった。

建物群の西側で検出したSX-1・2は、アカホヤ層内に掘り込まれた用途不明の特殊土坑で、SX-2がSX-1を切る形で作られている。SX-2の東側床面にあるSC-11は、床面が硬化し、埋土の最下層に砂粒混土層がみられることから、沈殿槽的な役割を果たした可能性がある。また、建物群とSX-2をつなぐSD-21・22は、造成でかさ上げされた敷地内から流れ出る雨水をSX-2に集める雨落しの溝とも考えられることから、少なくともSX-2については、（庭園としての）池の跡ではないかと考えた。

この他にも、屋敷内のすぐ南側から発見された土壇墓は、実年代が他の遺構とほぼ同じであることから、この屋敷地に伴う屋敷墓の可能性も示唆しておきたい。

(2) 遺物

遺物については、現在整理段階であるため、ここでは遺構の時期比定に有用なもののみをアトランダムに選択して掲載した。なお、各時期ごとの遺物の概要は下記の通りであり、掲載した遺物については観察表で一括して記述した。

① 弥生・古墳時代

この時期の土器は、ほとんどが住居跡内からの出土で、1のみがE'-41区の第Ⅲ層から出土している。なお、1については甕棺の可能性もある。石器もわずかではあるが、石鏃・石斧・石包丁などがみられる。8～10は、竪穴住居跡が分布しているD区の平坦面の下位、低湿地面から出土した土錘である。出土位置からみて古代の遺物の可能性もあるが、ここでは当該期のものとしてあつかった。

② 古代

古代の遺物は、D区の平坦面及び低湿地面の双方から多量に出土している。包含層（第Ⅲ層）内出土が主流であるが、道路状遺構や柱穴内に意図的に投棄したようなものもみられる。

遺物の種類は、圧倒的に須恵器が多く、わずかに土師器が加わる程度である。須恵器の器形は甕・壺・坏身・坏蓋・碗・高台付碗・皿・高坏と多岐にわたり、かなり大型の破片のものが多。また、底部に「秦」という墨書のはいった須恵器・高台付碗、皿、土師器・

碗と、体部最下部に花卉状の墨書が巡る土師器・坏が出土しているほか、須恵器・蓋を二次利用した転用硯も発見されている。

今回の調査では約900点の須恵器が出土しているが、この中には当地方ではこれまであまり出土していない坏蓋がかなり含まれており、これらの須恵器の蓋を模して作ったとみられる土師器の坏蓋も相伴して出土している。こうした蓋のつまみの形態や口縁の形状、碗や高台付碗の形態的特徴に依拠する限り、これらの須恵器の実年代は、8C後半から9C代と考えられる。なお、この他にも黒色土器や古代末から中世初頭頃の瓦質土器が出土しているが、数量的にはごくわずかである。

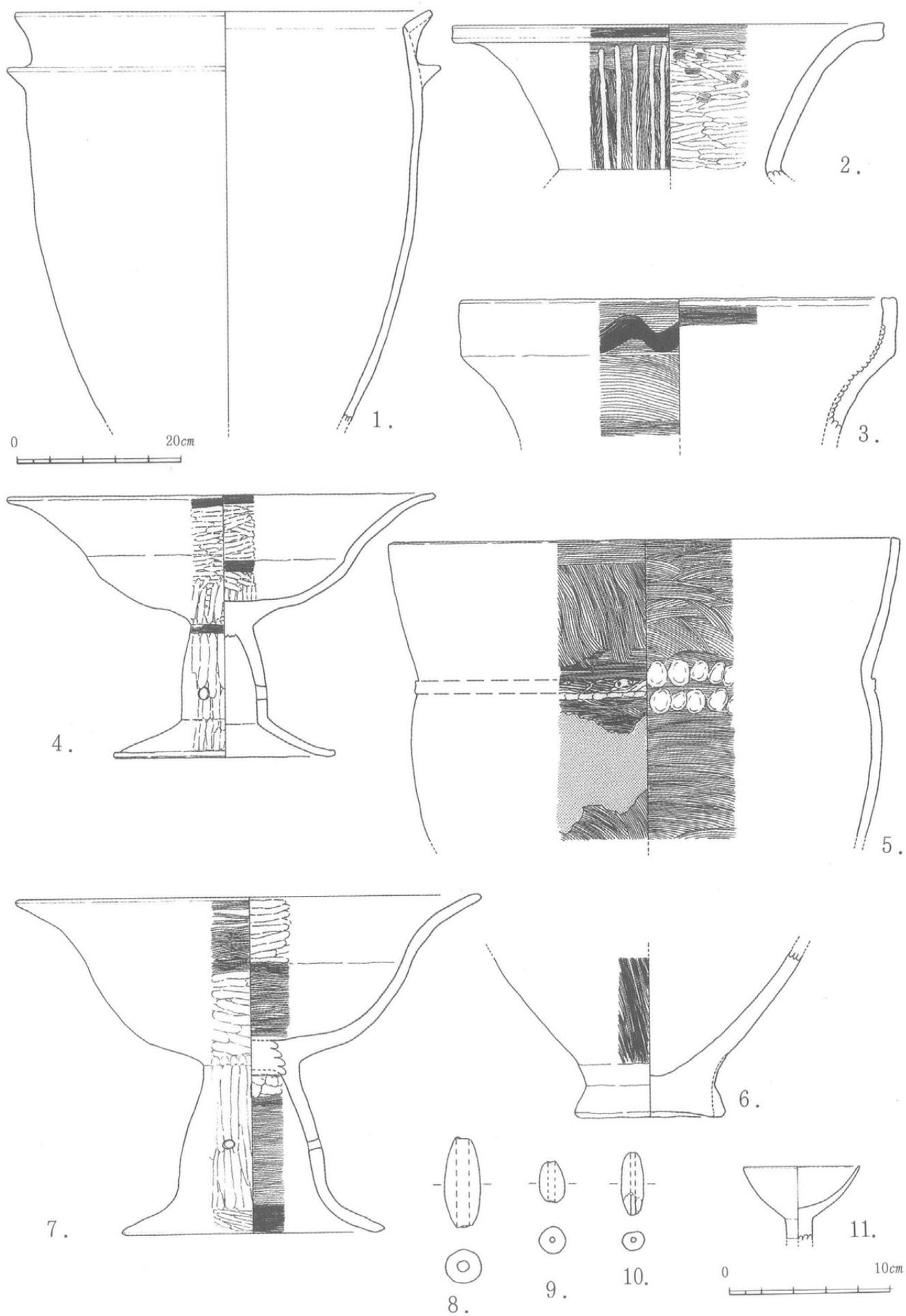
③ 中 世

調査区北東部の屋敷（居館）跡周辺から出土した陶磁器類・金属製品と、SD-1、SE-1から出土した木製品、SK-1の銭貨・ガラス玉などが当該期の主な遺物である。

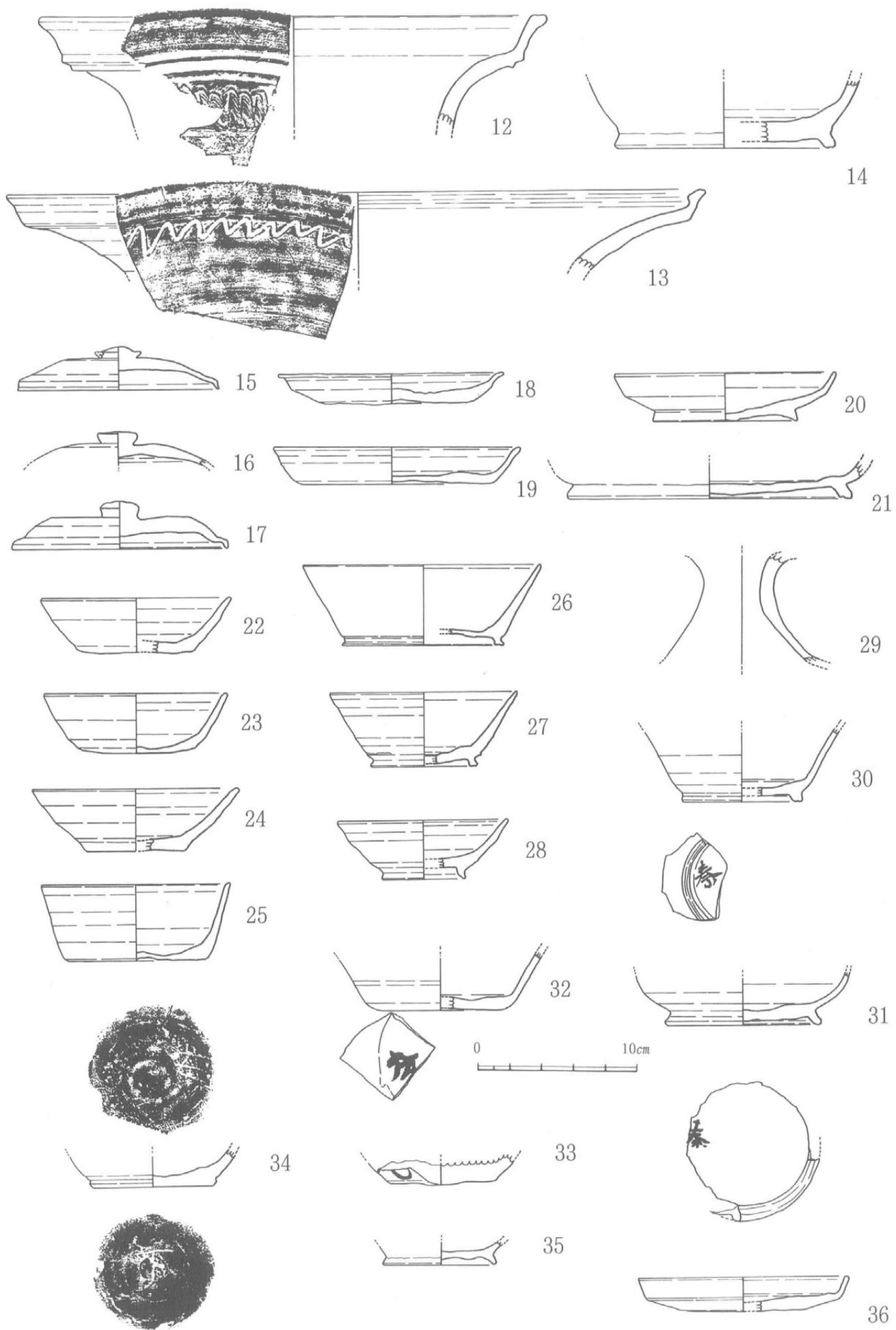
まず、陶磁器は舶載の青磁・白磁・青花（染付）、国産の陶器などがSD-1・2や柱穴の埋土中、包含層から出土しているが、その中でも16C代の青花（染付）が最も多く、その前後の時期の陶磁器類は少ない。つぎに木製品であるが、椀、下駄、鍋蓋のほか、木杭なども出土している。特に、椀にはろくろに固定して成形する時に底部についたと思われる径3mmほどの4つの穴や、けずり出しで作った低い高台などが明瞭に残っている。なお、樹種は、椀がクスノキ、下駄がヤマザクラ、鍋蓋がモミ属と同定されている。金属製品は、SK-1から出土した「洪武通宝」「永楽通宝」などの銭貨や柱穴内から出土した刀のはばきなどの他、火縄銃の弾も3点出土している。

番号	出土位置	器種・種別	器形及び部位	法 量	色 調	形態・成形技法の特徴	備 考
1	E' -41区	弥生土器	甕形 (口縁～胴部)	口径 50.6cm	内=橙色 外=橙色	口縁部は「く」の字口縁	甕棺か?
2	SD-1 埋土中	弥生土器	壺形 (口縁部)	口径 27.0cm (反転復元)	内=にぶい橙色 外=にぶい橙色	内=上半はヨコ方向のナデ 下半はヨコ方向のミガキ 外=口縁はヨコ方向のナデ 頭部はタテ方向のナデ	外器面にタテ方向の 暗文あり
3	SA-2 埋土中	土師器	複合口縁壺 (口縁部)	口径 27.4cm (反転復元)	内=淡黄色 外=淡黄色	内=上半はヨコ方向のナデ 下部は剥落 外=口縁はヨコ方向のナデ 頭部は斜方向のナデ	外器面の口縁部に櫛 描の波状文あり
4	SA-2 埋土中	土師器	高 坏	口径 26.6cm 底部 13.8cm	内=淡黄色 外=淡黄色	内=坏部がヨコ方向のナデとタテ・ヨコ方向のミガキ 外=坏部上半がヨコ方向のミガキ 脚部はタテ方向のミガキ	脚部に4個の穿孔あり
5	SA-2 埋土中	土師器	甕形 (口縁～胴部)	口径 39.0cm (反転復元)	内=浅黄色 外=黄褐色	内=上半は斜め方向のナデ 下半はヨコ方向のナデ 指頭痕あり 外=上からヨコ・斜・ヨコ方向のナデ 胴部にスス付着	凸部を板状工具でつぶし、 布を巻いた櫛状工具で施文 した刻目突起あり
6	SA-1 埋土中	土師器	甕形 (底 部)	底径 8.2cm	内=黄褐色 外=黄褐色	外=ヨコ方向のナデ	5・6は同一固体
7	SA-2 埋土中	土師器	高 坏	口径 29.0cm 底径 16.4cm	内=にぶい橙色 外=にぶい橙色	内=坏部がヨコ方向のミガキ・ナデ 外=坏部がヨコ方向のナデ・ミガキ 脚部はタテ方向のミガキ	脚部に4個の穿孔あり
8	C' -36区	土製品	土 錘	現長 5.2cm	灰白色	紡錘形 内径 0.7cm	
9	C' -36区	土製品	土 錘	現長 2.6cm	灰褐色	紡錘形 内径 0.3cm	
10	C' -36区	土製品	土 錘	現長 3.9cm	灰色	紡錘形 内径 0.3cm	
11	SA-1 埋土中	土製品	高 坏?	口径 6.8cm	内=浅黄褐色 外=浅黄褐色		祭祀土器か?
12	Y-39区	須恵器	壺形ないし甕形 (口縁部)	口径 32.0cm (反転復元)	内=灰オリーブ色 外=灰黄褐色	口縁下部に櫛描の波状文	
13	Y-37区	須恵器	大 甕? (口縁部)	口径 44.0cm (反転復元)	内=灰黄褐色 外=にぶい褐色	口縁下部に櫛描の波状文	

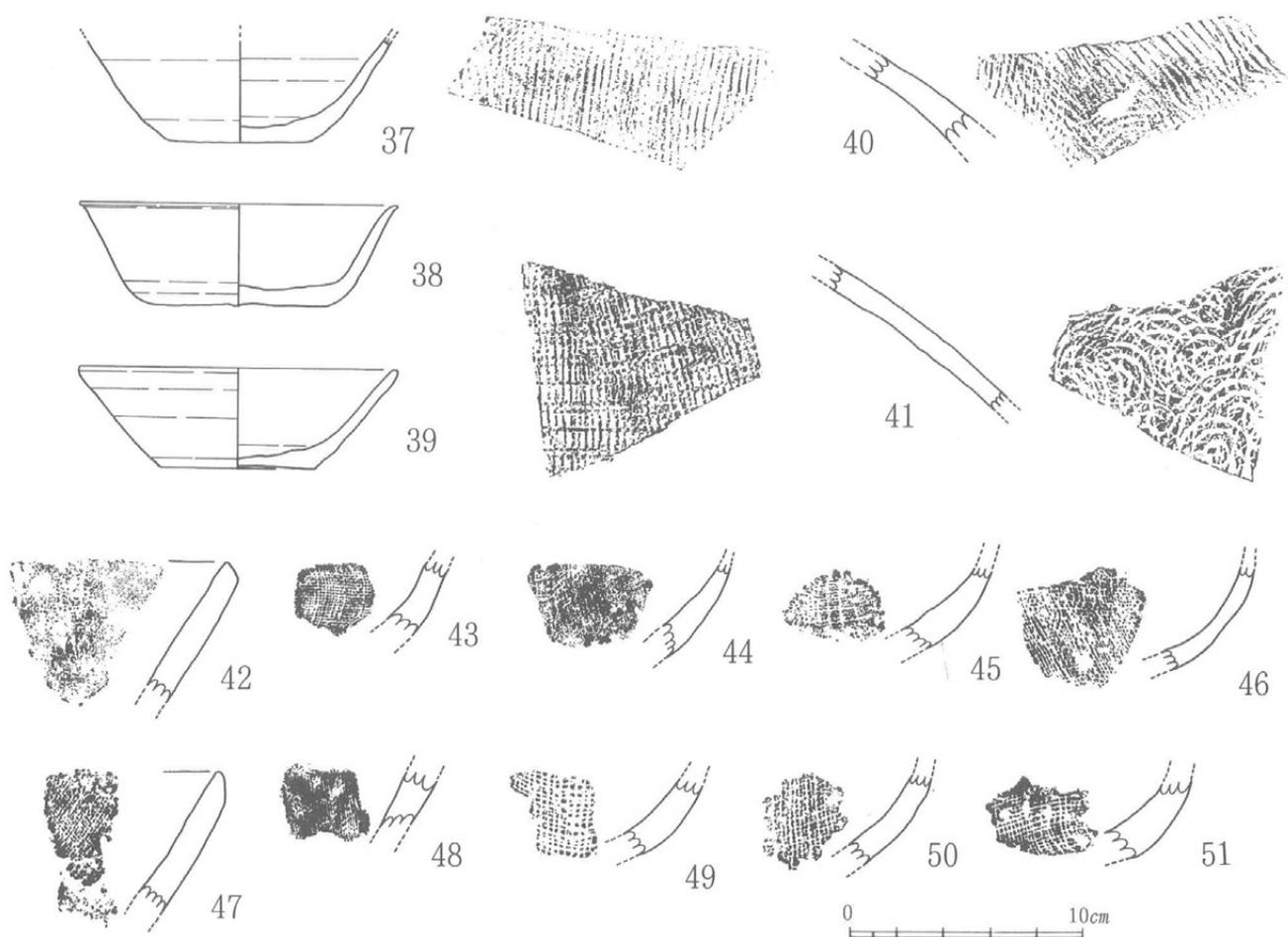
第1表 上ノ園第2遺跡出土遺物観察表①



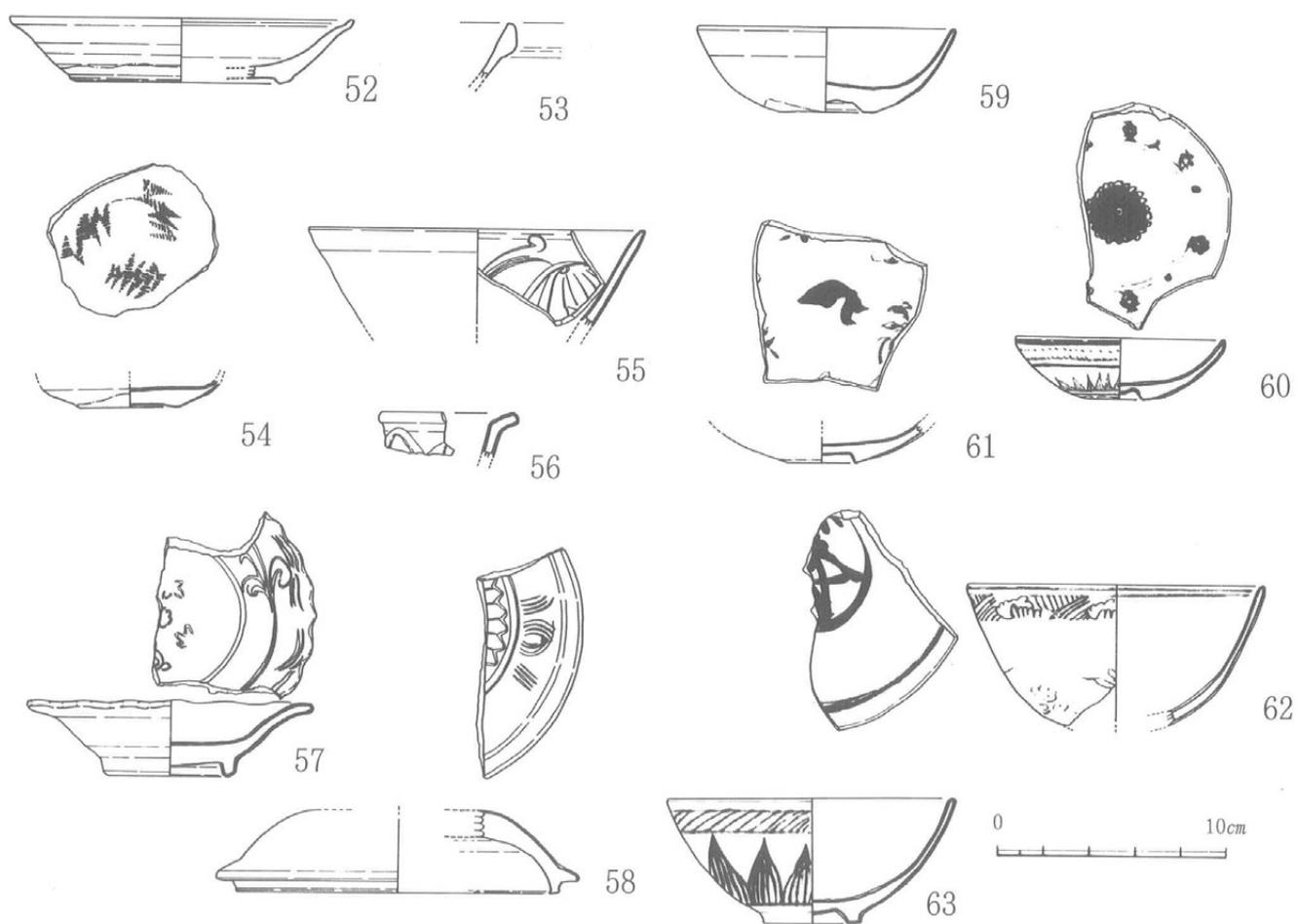
第6図 遺物実測図 (弥生・古墳時代)



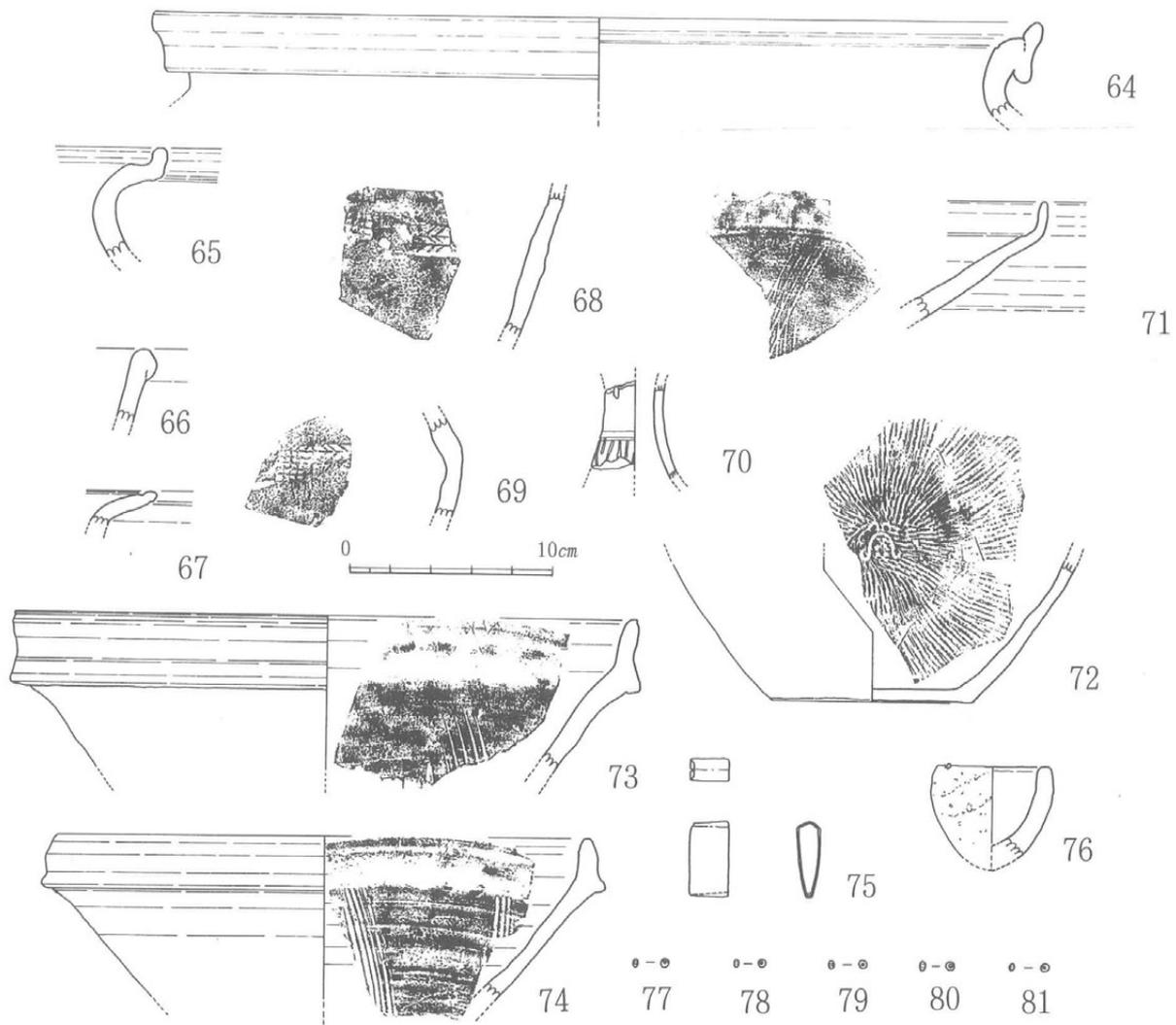
第7図 遺物実測図 (古代①)



第8図 遺物実測図 (古代②)



第9図 遺物実測図 (中世①)



第10図 遺物実測図 (中世②)

番号	出土位置	器種・種別	器形及び部位	法 量	色 調	形態・成形技法の特徴	備 考
14	S F - 5	須恵器	壺形か瓶形 (底 部)	底径 14.0cm (反転復元)	内=灰白色 外=灰色	高台内はヘラ切り	
15	X - 37区	須恵器	蓋	口径 12.6cm	内=灰色 外=灰色	つまみ・口縁とも大火の傾向が認められる	
16	Y - 37区	土師器	蓋		内=灰色 外=灰色	つまみ・口縁とも大火の傾向が認められる	
17	Y - 37区	土師器	蓋	口径 13.5cm	内=灰白色 外=灰白色		須恵窯で焼かれた土師器か?
18	S B - 51 P i t内	須恵器	皿	口径 14.2cm 底径 8.0cm	内=灰色 外=灰色		
19	A' - 36区	須恵器	皿	口径 15.6cm 底径 11.0cm	内=灰色 外=灰色		
20	C' - 36区	須恵器	(高台付) 皿	口径 14.0cm 底径 9.1cm	内=にぶい黄褐色 外=にぶい黄褐色		アカヤケ
21	B' - 36区	須恵器	大 皿 (底 部)	底径 18.0cm (反転復元)	内=灰色 外=灰色		
22	B' - 36区	須恵器	坏	口径 12.0cm 底径 7.2cm	内=灰色 外=灰色	体部はハの字に開く	
23	B' - 36区	須恵器	坏	口径 11.6cm 底径 7.4cm	内=灰色 外=灰色		
24	C' - 36区	須恵器	坏	口径 13.0cm 底径 6.2cm	内=灰黄褐色 外=灰黄褐色	体部はハの字に開く 底部は高台状になる	
25	Y - 37区	須恵器	坏	口径 11.8cm 底径 8.4cm	内=灰色 外=灰色	体部がほぼ垂直に立上がる	
26	V - 37区	須恵器	高台付碗	口径 15.0cm 底径 10.2cm	内=灰白色 外=灰色	体部の立上がりはストレートで、高台が低く、小さい	

第2表 上ノ園第2遺跡出土遺物観察表②

番号	出土位置	器種・種別	器形及び部位	法 量	色 調	形態・成形技法の特徴	備 考
27	Y-37区	須恵器	高台付碗	口径 11.8cm 底径 6.8cm	内=灰色 外=灰色	体部の立上りはストレートで、高台が低く、小さい	
28	C'-36区	須恵器	高台付碗	口径 10.8cm 底径 5.2cm	内=灰オリーブ色 外=暗灰黄色		
29	Z-36区	須恵器	高 杯		内=灰白色 外=灰白色		
30	B'-36区	須恵器	高台付碗 (胴部~底部)	底径 7.4cm (反転復元)	内=灰色 外=灰色		高台内に『秦』という墨書
31	Y-36区	須恵器	(高台付)皿 (胴部~底部)	底径 9.6cm (反転復元)	内=灰黄色 外=灰黄色		高台内に『秦』?という墨書
32	B'-36区	土師器	杯 (胴部~底部)	底径 7.6cm (反転復元)	内=にぶい黄褐色 外=にぶい黄褐色		底部に『秦』?という墨書
33	Z-36区	土師器	杯 (底 部)	底径 6.8cm (反転復元)	内=淡黄色 外=にぶい黄褐色		底部に花卉状の墨書
34	A'-36区	土師器	杯 (底 部)	底径 7.5cm	内=浅黄褐色 外=浅黄褐色	底部はヘラ切り	底部に『下』,内器面に『#』状のヘラ記号有り
35	B'-36区	黒色土器	高台付碗 (底 部)	底径 7.0cm	内=黒色 外=灰白色	内器面が黒色磨研されている (いわゆる内黒土師器)	
36	Y-36区	須恵器	蓋 (転用硯)	口径 13.3cm 底径 5.6cm	内=灰色 外=灰色	本来は、つまみのない蓋	内器面を硯として転用
37	B'-36区	土師器	杯 (胴部~底部)	底径 6.0cm (反転復元)	内=淡黄色 外=淡黄色	底部はヘラ切り	
38	A'-36区	土師器	杯	口径 13.6cm 底径 7.4cm	内=淡黄色 外=灰白色	底部はヘラ切り	
39	A'-36区	土師器	杯	口径 13.6cm 底径 6.4cm	内=浅黄褐色 外=浅黄褐色	底部はヘラ切り	
40	W-37区	須恵器	壺ないし甕 (胴 部)		内=灰色 外=灰色	内・外面ともにタテ方向のタタキ	
41	Y-37区	須恵器	壺ないし甕 (胴 部)		内=灰色 外=灰白色	内=同心円のタタキ 外=(升目の細長い)格子目タタキ	
42	B'-36区	布痕土器	丸底壺? (口縁部)		内=灰白色 外=淡黄色	布目の密なものを使用している	
43	A'-36区	布痕土器	丸底壺? (胴部ないし底部)		内=橙色 外=橙色	布目の密なものを使用している	
44	C'-36区	布痕土器	丸底壺? (胴部ないし底部)		内=橙色 外=橙色	布目の密なものを使用している	
45	B'-36区	布痕土器	丸底壺? (胴部ないし底部)		内=橙色 外=にぶい橙色	布目の密なものを使用している	
46	B'-36区	布痕土器	丸底壺? (胴部ないし底部)		内=にぶい橙色 外=にぶい橙色	布目の密なものを使用している	
47	A'-36区	布痕土器	丸底壺? (口縁部)		内=橙色 外=にぶい橙色	布目の密なものを使用している	
48	A'-36区	布痕土器	丸底壺? (胴部ないし底部)		内=橙色 外=橙色	布目の密なものを使用している	42,44,48は類似した布を使用している
49	Y-37区	布痕土器	丸底壺? (胴部ないし底部)		内=にぶい橙色 外=にぶい橙色	布目が粗雑	
50	C'-36区	布痕土器	丸底壺? (胴部ないし底部)		内=にぶい橙色 外=にぶい橙色	布目が粗雑	
51	Y-37区	布痕土器	丸底壺? (胴部ないし底部)		内=にぶい橙色 外=にぶい橙色	布目が粗雑	49,51は布目が類似
52	D区中世建物群 盛土内一括	白 磁	端反皿	口径 15.6cm (反転復元)		体部から高台内にかけては無釉	15C代 ?

第3表 上ノ園第2遺跡出土遺物観察表③

番号	出土位置	器種・種別	器形及び部位	法 量	色 調	形態・成形技法の特徴	備 考
53	D区 近代溝内	白磁	碗 ?			口縁部が玉縁状	13C代 ?
54	A' -44区	青磁	皿 (底部)	底部 4.2cm		内面見込みに櫛描き文がみとめられる	13C代 ? 同安窯系
55	SD-1 埋土中	青磁	碗 (口縁~胴部)	口径 14.8cm (反転復元)		内器面体部に画花文がみとめられる	
56	SD-1 埋土中	青磁	碗 ? (口縁)			外器面にヘラ削りの蓮弁がみとめられる	
57	SD-1 埋土中	青磁	稜花皿	口径 12.4cm 底径 5.2cm			
58	D区中世建物群 盛り土内一括	青磁	蓋	口径 14.0cm (反転復元)			
59	S-43区	青花 (染付)	皿	口径 11.4cm 底径 4.2cm		碁笥底	呉須が発色せず、白 磁状になったもの?
60	D区中世建物群 Pit内	青花 (染付)	皿	口径 9.2cm 底径 2.2cm		外器面体部に芭蕉葉文 内面見込みに芙蓉が描かれている	碁笥底
61	SK-1 埋土中	青花 (染付)	皿 (底部)	底径 3.0cm		内面見込みに、赤色の魚が描かれている	碁笥底
62	SK-1 埋土中	青花 (染付)	碗 (口縁~胴部)	口径 13.1cm (反転復元)		外器面体部に抽象化された文様がみとめられる	
63	SD-2 Pit内	青花 (染付)	碗	口径 12.6cm 底径 4.2cm		外器面体部に芭蕉葉文、内面見込みに寿福文字が 描かれている	
64	SD-1 床面	常滑焼	大甕 (口縁部)	口径 44.2cm	外=暗オリーブ色 内=暗赤褐色		14C前半頃
65	B区一括	常滑焼	甕 (口縁部)		外=明赤褐色 内=にぶい褐色		13C後半~ 14C前半
66	V-38区	常滑焼	壺 (口縁部)		外=灰白色 内=灰褐色		13C後半~ 14C前半
67	V-37区	常滑焼	壺あるいは瓶 (口縁部)		外=にぶい赤褐色 内=にぶい赤褐色		
68	W-37区	常滑焼	甕 (胴部)		外=にぶい橙色 内=にぶい褐色	外器面に矢羽・格子目のタタキがみとめられる	13C後半~ 14C前半
69	X-37区	常滑焼	甕 (胴部)		外=にぶい褐色 内=にぶい褐色	外器面に矢羽・格子目のタタキがみとめられる	65,68,69は同一固体
70	C区 2層一括	彩釉陶器	瓶 ? (頸部)			上半が黄色、下半が黄緑色を呈している	国産の彩釉陶器?
71	SC-2 埋土中	肥前系	播鉢 (口縁~胴部)		外=浅黄色 内=浅黄色		
72	SD-1 埋土中	薩摩焼	播鉢 (胴部~底部)	底径 10.0cm (反転復元)	外=赤褐色 内=灰褐色	内面見込みに陰刻あり	
73	D区中世建物群 盛り土一括	備前焼	播鉢 (口縁~胴部)	口径 30.4 (反転復元)	外=褐色 内=にぶい褐色		
74	SD-1 埋土中	備前焼	播鉢 (口縁~胴部)	口径 26.4cm (反転復元)	外=にぶい赤褐色 内=灰白色		
75	SB-19 Pit埋土中	金属製品	刀剣のはばき	現長 3.8cm		青銅製・刀幅が狭いので短刀か? 刃部側に木質が残存	産地がみられないので、少なくとも 鎌倉時代以降のものである
76	D' -37区	金属加工 関連遺物	るつば	口径 5.8cm		外器面に、金属精製時の不純物がわずかに付着し ている	
77	SK-1 埋土中	ガラス玉	数珠玉 ?	径 0.4cm 厚み 0.23cm	青色		
78	SK-1 埋土中	ガラス玉	数珠玉 ?	径 0.42cm 厚み 0.25cm	緑色		
79	SK-1 埋土中	ガラス玉	数珠玉 ?	径 0.41cm 厚み 0.28cm	白色		
80	SK-1 埋土中	ガラス玉	数珠玉 ?	径 0.38cm 厚み 0.24cm	緑色	表面に石灰質のものが付着	
81	SK-1 埋土中	玉	数珠玉 ?	径 0.45cm 厚み 0.18cm	灰色	ガラス質ではなく石質に近い素材	

第4表 上ノ園第2遺跡出土遺物観察表④

第IV章 小 結

ここでは、今回確認した遺構のうち遺跡の南側部分で検出した古代の建物群と、北側の姫城川沿いで発見された中・近世の建物群、および氏姓と思われる墨書について付記しておきたい。

(1) 古代の建物群の時期的・機能的位置付けについて

古代の掘立柱建物跡は、現在までに31棟を確認している。当該部分で検出した柱穴が約1,200箇所であったことを勘案すると、今後の整理段階で増加する可能性は否めないし、また、確認した建物跡の中に古代以降のものが含まれていることも十分に考えられる。そこで、ここでは埋土中から遺物が出土したり、Pitの埋土が当該期のものであると確認している建物跡のみを対象に考察した。

まず、これらの建物群の時期的位置付けであるが、柱穴及び道路状遺構の埋土内出土の須恵器と、同建物群南側の低湿地面から多量に出土した須恵器の年代観による限り、その存続機関は8C後半から10Cにかけての約250年前後と推察される。当地方における須恵器の出土例の少なさや、産地同定研究の立ち遅れなどを考えると、この時期比定にはいささか疑問がもたれるものの、坏身・坏蓋などの形態的な特徴には、前記した時期の特徴に該当するものが多くみられる。また、その中でも、8C後半から9C代に比定できる須恵器の出土量が、他に卓越している、というのが現在までの印象である。

次に、これらの建物群の機能的位置付けであるが、(1)遺構の部分で詳述したように、公共機能的な様相を示す建物群、というのが現段階での推察である。その判断基準としては、①L字型に建物群を取り囲む溝、②倉庫跡と推定される大型の掘立柱建物跡、③供膳具と思われる須恵器の多量出土と、墨書土器・転用硯の出土が挙げられる。しかしながら、各要素とも官衙機構のクラスとして位置付けるのに必要な条件ではあるが、十分に足るほど充実した状況ではなく、前述した郷クラスの建物群との比較・検討後、再考していきたいと思う。

(2) 中・近世の建物群について

この建物群については、(1)遺構で概略を記したので、ここでは溝に囲まれた屋敷地（居館）として模式的に捉え、補足しておきたい。

まず、この屋敷地を取り囲む2条の溝（SD-1・2）については、SD-1の西側（門状遺構を挟んだ西側）部分だけが、少なくとも4時期（①文明降下軽石噴出前、②文明降下軽石噴出直前、③文明降下軽石噴出直後、④近世以降）にわたる土層堆積の様子を確認できるものの、他はほぼ②以降の時期の埋没状況しか観察できなかった。つまり、建物

群内から出土した陶磁器類の実年代から推定される屋敷の開始時期（15前半頃）において、門状遺構を中心として東西方向に延びるSD-1・2が整備され、完結した屋敷地として機能し始めたと考えられよう。

次に今回検出した建物群については、前述したようにアカホヤ面まで削平した後に造成・盛土し、構築されたものが主流のようである。しかし、一部には造成前に掘られたと思われる柱穴もみられることから単一時期（当然、造成後の建物群にも立て替えが行われたものと思われるので、ここでは造成後のものを一単位とした場合）の建物群ではなく、SD-1の最初の構築時期（①の段階）に伴う建物群の存在の可能性も示唆しておきたい。また、今回の調査で検出した建物群の機能については、プランの規模や柱穴の大きさ、半地下倉庫とみられる、いわゆる竪穴状遺構の分布などから、屋敷の中でも居住施設（会所など）に付属する建物群と考えた。

最後に、建物群の西側に分布するSX-1・2を中心とした園池（庭園遺構）と思われる部分については、他の遺構との位置関係や形態的・構造的特徴において判断する限り、他の用途が想定できにくいことから、そうした特殊遺構として考えた。

いずれにしても、この屋敷の開始時期（15C後半頃）は、後に都城盆地を統一した都城島津氏（北郷氏）と伊東氏・樺山氏などが、都城盆地を巡ってしのぎを削っていた戦国の時代であり、そういう状況下で、それほど要害でもないこの地に園池（庭園）を配した屋敷を構えていた人々の人物像については、文献史料や古地図等に照らすかぎり浮かび上がってこない。ただ、北郷氏によって編纂された史料には記載されていないものの、遺跡の隣接地に残る「弁済使」という地名や当時の勢力関係などから、北郷氏と何らかの関わりをもった人々に営まれていたのではないかということをも前提に、今後整理を行っていきたいと思う。

* 1471（文明8）年に噴出した桜島起源の軽石層。白色のパミスで、通称『文明の白ボラ』

（3）墨書土器にみられる氏姓について

現在までに確認している墨書土器は4点である。そのうち氏姓を記したと思われるものは3点で、いずれも「秦」ないしそれに近い文字が、須恵器の高台付碗の高台内部や土師器の碗の底部の縁の、似たような場所に書かれている。書体は同一のものではないが、記されている文字や場所がほぼ同じことから、なんらかの規格性をもったものではないかと考えられる。

さて当地方において氏姓とみられる墨書が出土したのはこれが初めてであり、また「秦」姓に関連した資料についても、これまで皆無であった。ただ、豊前・豊後でよくみられるこの姓が、どうして当遺跡から出土した土器に記されていたのかという問題は、これらの

土器が出土した古代の建物群の位置付けとともに重要な問題である。

都城盆地は、古くは日向国に属するが、地理的には旧大隅国の縁辺部に近く、その影響を多分に受けていた可能性が高い。永山修一氏の御教示によると、その大隅国へは、8 C 代に、秦姓の多い豊前・豊後国から軍事的意味合い（在地の熊襲・隼人族の教導）のもとに大量移民が行われたという記載がみえるらしく、こうした新勢力の余波が、この地まで波及したということも十分に考えられることである。つまり、今回検出した建物群が、規模としては郷クラスであることもあわせて考えると、新たに入植してきた秦一族によって形成された集落、もしくはその運営の中枢に秦一族が存在する集落として考えることもできるのではないだろうか。

いずれにしても、遺構・遺物の整理が継続中の現段階では、どの問題も論拠が弱く、推察の域を出ない。すべてデータが出そろった段階で再考することとし、詳細は本報告で行いたい。



上ノ園第2遺跡全景（北東上空より）



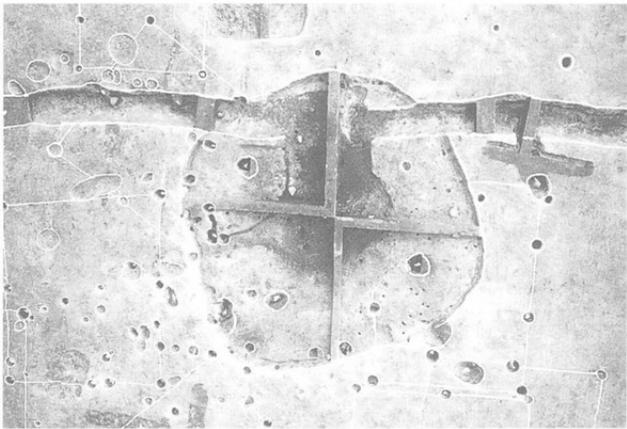
上ノ園第2遺跡C・D区全景（垂直上空より）



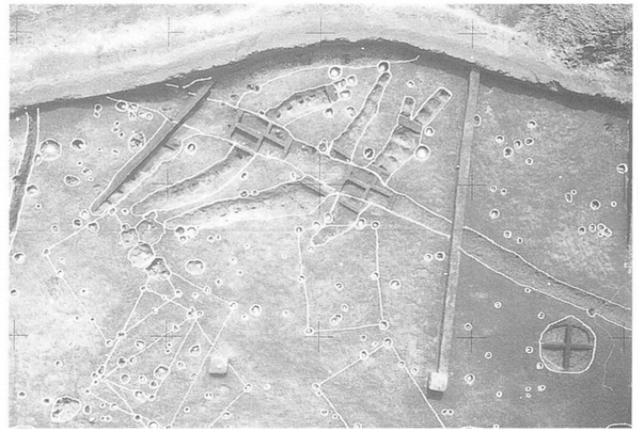
SA-2 (2号住居跡) 完掘状況 (南より)



SD-12・13(12・13号溝)検出掘り下げ状況(東より)



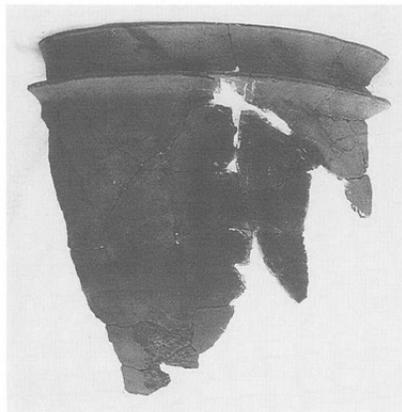
SA-2 (2号住居跡) 完掘状況 (上空より)



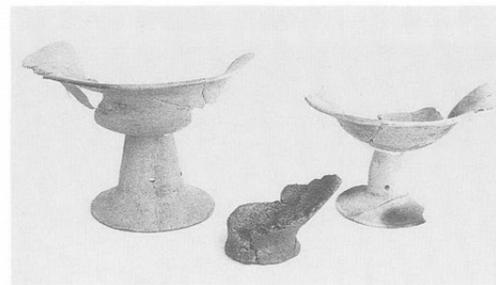
SF-2~6(2~6道路跡) 完掘状況 (上空より)



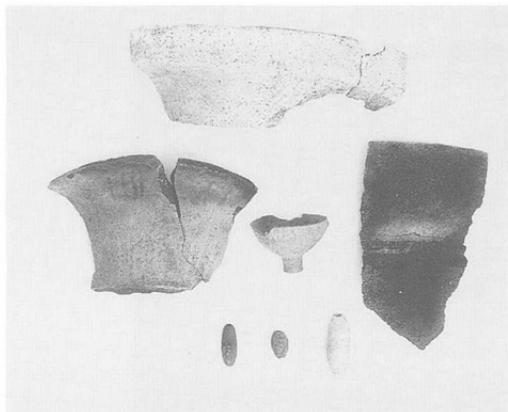
中世の掘立柱建物群全景



甕形土器（弥生）



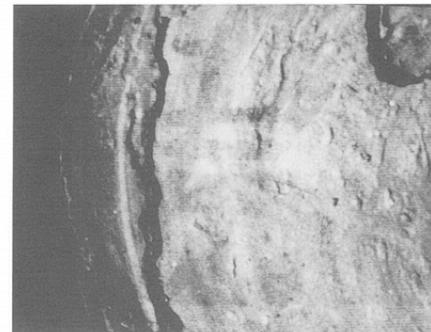
高坏，甕の底部（古墳）



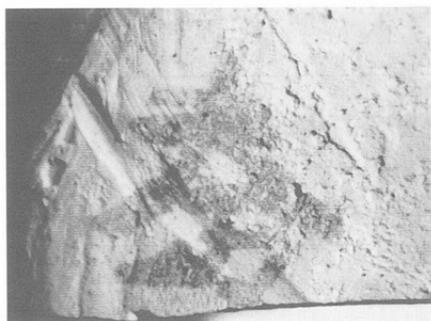
甕・壺の口縁，土錘（弥生・古墳）



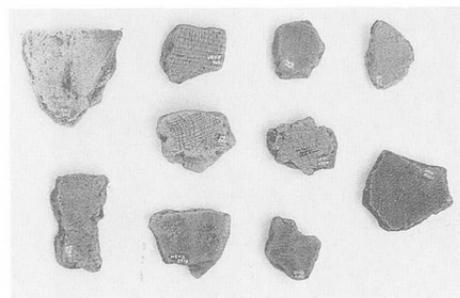
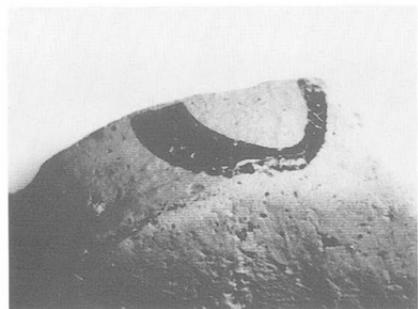
墨書土器（赤外線写真）



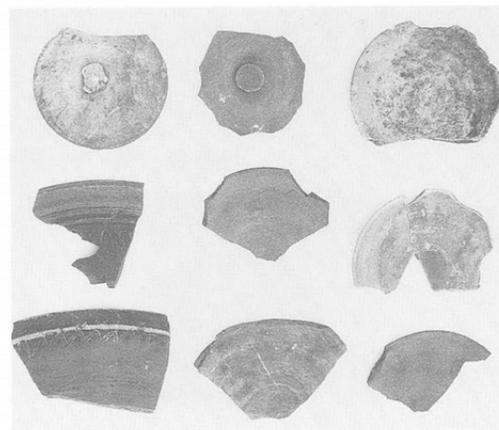
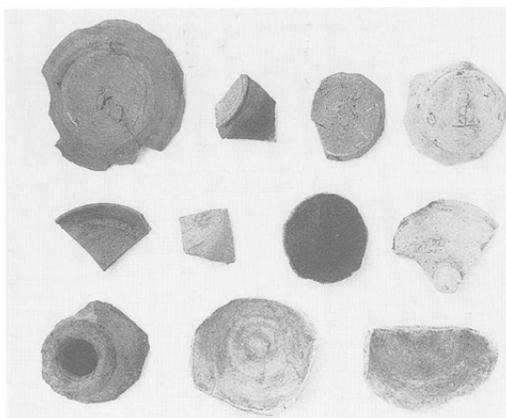
墨書土器（赤外線写真）



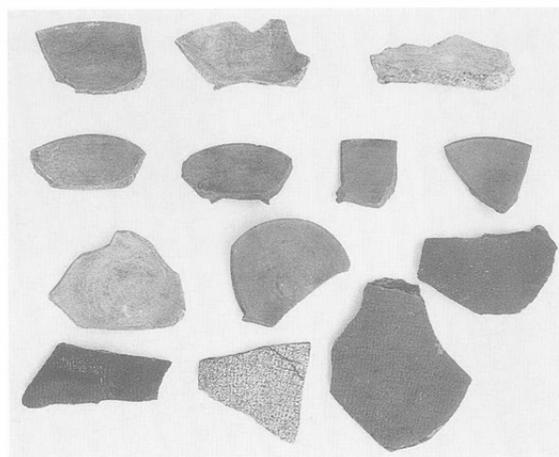
墨書土器 (赤外線写真, 上・下)

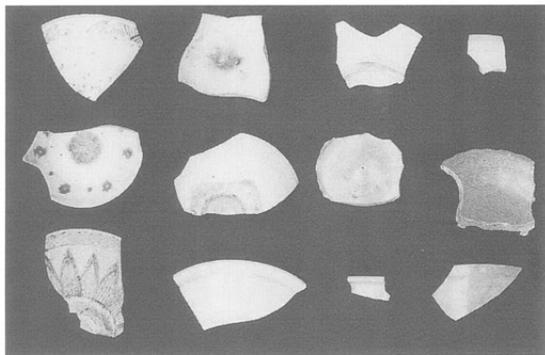


布痕土器 (内器面)

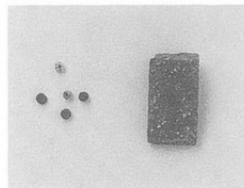


上ノ園第2遺跡出土 須恵器 (上・下)

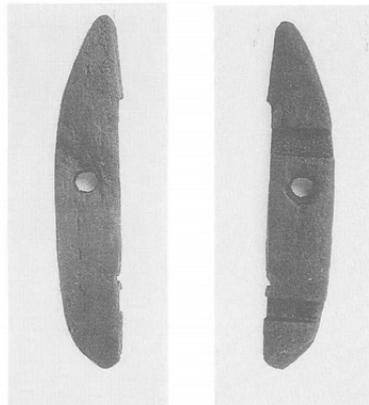




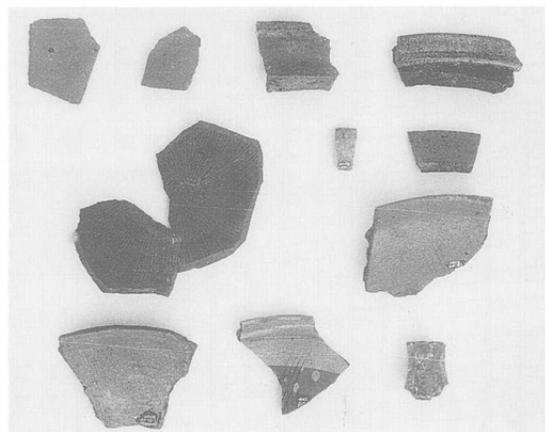
舶載磁器類



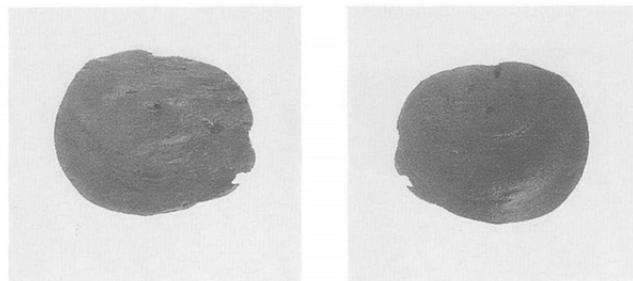
青銅製はばき（右）
とガラス玉（左）



ヤマザクラ製の下駄（左・表, 右・裏）



国産陶器類



クスノキ製の碗（左・表, 右・裏）

都城市文化財調査報告書第27集

上ノ園第2遺跡

平成6年3月

発行

都城市教育委員会

都城市姫城町6街区21号

印刷

有限会社 文昌堂